様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月　７ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2023
課題番号：１７Ｋ０３０６５

研究課題名（和文）日本古代木簡の源流と特質

研究課題名（英文）Origins and characteristics of ancient Japanese wooden tablets

研究代表者
市　大樹（ICHI, HIROKI）

大阪大学・大学院人文学研究科（人文学専攻、芸術学専攻、日本学専攻）・教授

研究者番号：００３４３００４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、①東アジアという視点から「日本古代木簡の源流と特質」を探ること、②木簡研究から導き出される〈文書機能論〉の観点から、新たな史料学に向けた提言をすること、③木簡研究の成果を日本古代国家論のなかに反映させることを目標とした。日本古代木簡に関する実物に即した多彩な検討、墨書土器・金石文・法制史料・古文書など諸史料に関する考察、韓国木簡との比較検討を中心に進め、①については一定の見通しを得ることができ、②についても問題提起をおこなうことができた。③については、宮都・交通に関する研究ともリンクさせ、研究書『日本古代の宮都と交通－日中比較研究の試み－』を刊行することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
日本古代木簡に関して、さまざまな観点から実物に即した検討をおこない、あわせて墨書土器・金石文・法制史料・古文書など諸資料に関する考察や、韓国木簡との比較検討も交えることによって、日本古代木簡の源流と特質について一定の見通しを得ることができた。これは新たな史料学や東アジア木簡学の構築に向けての第一歩となるものである。また、これら木簡研究の成果も組み込みながら、宮都・交通に関する知見を深め、専門書として取りまとめた。これは日本古代国家成立論にも資するものと考える。研究成果は、専門書や学術論文として公開したほか、一般向けの書籍にも執筆しており、社会的還元を果たしている。

研究成果の概要（英文）：This study aims to ①explore the origins and characteristics of ancient Japanese wooden tablets from the perspective of East Asia; ② make recommendations for a new historiography from the perspective of document function theory; ③reflect the results of research on wooden tablets. By focusing on a variety of studies on ancient Japanese wooden tablets, on various historical materials such as ink-painted pottery, stone inscriptions, legal historical materials, and ancient documents, as well as on comparative studies with Korean wooden tablets, we were able to provide a general outline of ①, and also address issues regarding ②. I was able to make a complaint. Regarding ③, we were able to link this research with research on imperial capitals and transportation, publish the research book ``Japanese Ancient Imperial Capitals and Transportation - An Attempt at Comparative Research between Japan and China.''

研究分野：日本古代史

キーワード：日本古代木簡　韓国木簡　史料学　文書木簡　荷札木簡　宮都　交通　日本古代国家成立

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

日本列島では、1928 年に柚井遺跡（三重県桑名市）で木簡が初めて出土して以来、50 万点近い木簡が出土している。このうち中心を占める日本古代木簡については、1961 年に平城宮跡で出土して以来、奈良（国立）文化財研究所の研究員を中心に研究方法の模索がおこなわれてきた。1979 年に木簡学会が創設されると、木簡の記載内容だけでなく、発掘遺物として、木簡自体の基本的かつ総合的研究が本格化することになった。木簡研究の方法論に関していえば、特に次の 3 点が提起されたことが特に重要であると考える。

（1）木簡は文字資料であるが、発掘調査で出土した考古資料でもある。遺跡・遺構の状況を踏まえ、木簡の形状にも留意しながら、文字だけから窺われない情報を最大限に読み取る。

（2）木簡を群として捉える視点に立って、木簡のライフサイクル（木簡が作成された後、いかにして使用され、最終的に廃棄されたのか）を明らかにする。木簡の使用場面を具体的に思い描きながら、場面ごとに木簡の機能を追求する（木簡の多機能性）。

（3）木簡の周囲に目を向け、紙と木の使い分け、文書伝達と口頭伝達の関係を意識して分析する。

長年、日本史研究者の主たる木簡の研究対象は、平城宮・京跡出土の奈良時代の木簡であった。中国の木簡はあまりにも時期が古すぎたこと、韓国木簡は点数が極めて少なく情報が乏しかったこともあって、日・中・韓の木簡を相互比較しようとする発想はほぼ皆無に等しかった。ところが、1990 年代後半から 2000 年代にかけて、飛鳥・藤原京跡から飛鳥時代の木簡が大量に出土し、韓国でも木簡の出土点数が相次ぎ、図録『韓国の古代木簡』も刊行された。両者には類似点が多かったこともあり、日韓の木簡を本格的に比較する研究が登場し、朝鮮半島が日本古代国家の形成に与えたインパクトに注意が向けられた。長らく日本の木簡は、日本史の枠組みにとどまっていたが、新たに東アジアという視点から位置づけ直す必要性が生じてきたのである。

こうした状況のなか、研究代表者は、2000 年 1 月から 2008 年 3 月に奈良文化財研究所に在籍し、上記（1）～（3）の方法論を習得した。特に 2002 年 5 月以降は、飛鳥・藤原京跡の発掘調査と木簡整理に従事し、当事者として新たな研究動向に関わり、『飛鳥藤原宮発掘調査木簡概報 16～22』（2002 年～2008 年）で新出木簡を速報的に報告するとともに、全国の評制下荷札木簡を集成した『評制下荷札木簡集成』（2006 年）、木簡の正報告書『飛鳥藤原京木簡 1・2』（2007 年、2009 年）などを刊行した。また、韓国国立文化財研究所との共同研究で韓国木簡の実物調査にあたり、また、西河原遺跡群（滋賀県）出土木簡など飛鳥時代の地方木簡の実物調査もおこない、それぞれ論文を発表してきた。そして、これらの研究成果を基礎に、単著『飛鳥藤原木簡の研究』（2010 年）、『飛鳥の木簡』（2012 年）を刊行した。

その後、国立歴史民俗博物館の国際展示「文字がつなぐ―古代の日本列島と朝鮮半島―」（2014 年）に結実する共同研究に加わり、朝鮮半島から日本古代木簡を考える視点を一層強めていった。あわせて、基盤研究(A)「東アジア木簡学の確立」（代表：角谷常子、2009 年度～2013 年度）、同「古代中世東アジアの関所と交通政策」（代表：鷹取祐司、2012 年度～2016 年度）に参画して、中国木簡の研究動向を学んだ。そうした恵まれた研究環境を活かす形で、基盤研究（C）「東アジアにおける日本古代文書論の再構築」（代表：市大樹、2013 年度～2016 年度）において、中国・韓国木簡と対比させながら日本古代木簡の再検討をおこなった。そして、「古文書学から史料学へ」という研究動向の流れをたどり、そのためには〈文書機能論〉の充実化が資すると考え、その前提作業として、日本と中国の律令条文の比較を手がかりに、交通制度の解明などにも取り組んできた。

２．研究の目的

本研究では、上記のような研究背景のもと、①東アジアという視点から「日本古代木簡の源流と特質」を探ることを目指すことにした。日本古代木簡の研究は、世界に誇るべき方法論をもち、豊かな研究成果をあげてきたが、残念ながら日本史の枠組みにとどまっているからである。中国・韓国の木簡研究にも正面から向き合うことによって、それらの方法論を学ぶとともに、日本古代木簡の研究で培われた方法論の発信につとめ、その相乗効果によって日本古代木簡研究の飛躍を図る必要があると考える。

これに関連して、②木簡研究から導き出される〈文書機能論〉の観点から、従来の〈文書様式論〉に依拠した古文書学の再検討をおこない、新たな史料学に向けた提言も試みてみたい。さらに、③木簡研究の成果を日本古代国家成立論のなかに反映させることも狙う。そして、②③によって、木簡研究の有効性を示したいと考える。

３．研究の方法

本研究では、上述の研究目的①～③に少しでも迫るために、次のような研究方法を採用することにした。

第一に、日本古代木簡の資料的特質を明らかにする作業である。日・中・韓における木簡比較研究のための足固めとして、上記（1）～（3）の方法論にもとづいて、実物調査と内容検討を着

実に進める。木簡に関しては、文書木簡、荷札木簡について特に詳しく検討し、古文書学との接点も探るようにつとめる。木簡を分析する際には、可能なかぎり木簡の出土した遺跡にも足を運び、文字以外の情報を得るように心がける。

第二に、木簡の資料的特質を浮かび上がらせるために、墨書土器など他の出土文字資料、正倉院文書などの古文書、律令などの法制史料、石碑などの金石文といった、多様な諸資料についても分析をおこなう。特に律令に関しては、極めて多くの情報を有するので、日中比較研究につとめることにしたい。

第三に、日本古代木簡の源流に迫るための手段として、東アジアの木簡についても取り上げ、上記（1）～（3）の方法論を意識しながら検討を進める。あわせて、日本古代木簡との比較検討もおこなう。

第四に、木簡研究の成果も取り込みながら、宮都・交通の分野を中心に検討を進め、日本古代国家成立論について考察する。

４．研究成果

当初 5 年間の研究としてスタートしたが、新型コロナウィルスの感染拡大によって、現地調査が思うようにできなくなったことなどから、2 年間の延長をおこなうことになった。合計 7 年間にわたって研究に従事できたこともあり、それなりの研究成果をあげることができたと考える。ここでは、論文（図書所収のものも含む）として発表したものを中心に、口頭発表・書評などの一部にも触れつつ述べる。上記の研究方法に概ね対応させながら示すが、これらは相互に密接に関係しており、あくまでも便宜的な分類であることを断っておく。

◆日本古代木簡に関する研究成果

〈全般的なもの〉　論文「日本古代木簡の資料的特質―廃棄論・機能論・形態論の視点から―」において、木簡廃棄論、木簡機能論、木簡形態論という視点から、日本古代木簡の全体を俯瞰し、その資料的特質を明らかにした。また、本論文では、古文書学の研究動向についても言及し、新たな史料学を打ち立てるための第一歩とした。書評「馬場基著『日本古代木簡論』」において、新たに提起された「木簡の作法」論を中心にコメントをおこない、研究代表者の木簡の基本的な捉え方を端的に述べた。

〈文書木簡〉　論文「日本古代文書木簡の展開」において、大宝公式令との関係に留意しながら、7、8 世紀における日本の文書木簡の時期的な特徴を明らかにした。

〈荷札木簡〉　論文「隠岐国荷札木簡とその周辺」において、荷札木簡の基本的性格を論じた上で、隠岐国の荷札木簡 130 点を対象に、出土遺跡、時期的特徴、地域的特徴について整理し、サトの変遷と郷里制下のコザト、海評・海部郡の氏族分布、海産物の荷造りに関して問題提起をおこなった。論文「美濃国荷札木簡の世界」において、美濃国の荷札木簡 76 点を対象に、行政地名の変遷、税物に関する問題を論じた。口頭報告「聖武天皇の伊勢行幸と万葉集・志摩国荷札木簡」において、聖武天皇の伊勢行幸の際に詠まれた万葉歌について、志摩国の贄の荷札木簡に関する知見をもとに再解釈を試みた。

〈その他〉　論文「木簡と日本書紀の用字」において、同時代史料である木簡の文字遣いが、編纂史料である『日本書紀』ではどのように改変されているのかを探ってみた。論文「飛鳥時代の木簡と歴史教育」において、高等学校の歴史教育の現場に、木簡をどのように活用できるのかを論じてみた。また、口頭報告「木簡と万葉集」において、木簡と『万葉集』で共通する事例を拾い出し、両者の関係を探りながら、木簡研究が『万葉集』研究に有益であることを示した。

◆木簡以外の諸資料に関する研究成果

論文「宮都の墨書土器」において、木簡との関係にも言及しつつ、土器の生産・納品、土器の保管・使用という場面（土器のライフサイクル）に即して、土器に墨書をすることの意味を考えてみた。論文「石碑からみた日本古代社会」において、中国・朝鮮半島の石碑との比較を交えながら、日本古代における石碑の特徴を探り、なぜ日本古代には石碑文化が根付かなかったのかを論じた。また、書評「小倉慈司・三上喜孝編『国立歴史民俗博物館研究叢書 4　古代日本と朝鮮の石碑文化』」において、近年の重要な研究成果に関するコメントをおこなった。論文「天平期節度使体制下の文書送達―出雲国計会帳にみえる節度使関係文書の検討―」において、正倉院文書の一つである出雲国計会帳を詳しく分析した。書評「河内祥輔、小口雅史、M・メルジオヴスキ、E・ヴィダー編『儀礼・象徴・意思決定―日欧の古代・中世書字文化―』―日本史の側から―」において、古文書の機能面について、日欧の広い視野から位置づける試みをおこなった。

◆東アジア木簡学の構築に向けての研究成果

〈全般的なもの〉　論文「木簡と東アジア」において、中国木簡・韓国木簡・日本木簡の相互関係について、「簡牘時代から紙木併用時代へ」という視点から、現在の研究状況を大づかみに整理をおこなった上で、東アジアにおける日本木簡の特徴を考えてみた。論文「木簡の視覚機能という考え方」において、中国木簡の研究を通じて提起された視角機能という考え方を、日本の木簡に適用することの有用性について論じた。

〈韓国木簡との比較〉　論文「日本の 7 世紀木簡からみた韓国木簡」において、韓国の城山山城跡出土の荷札木簡、慶州月城跡出土の文書木簡について詳しく検討をおこなった。検討にあたっ

ては、日本の 7 世紀木簡に関する知見が大いに参考になることを具体的に示した。論文「日本の７世紀木簡と韓国木簡」において、物品・人間を把握するための記録木簡、上申のための文書木簡に焦点をしぼって、日韓木簡の比較研究をおこない、日本の木簡文化が朝鮮半島に多くを追っていることを具体的に示した。このほか、韓国木簡学会において、「三上喜孝「日本古代木簡の型式分類と機能的分類」に関するコメントをおこない、木簡の型式分類・機能的分類に関する研究現状と課題について述べ、これらの視点は東アジア木簡学の上でも有用であることを示した。

◆日本古代国家成立論に関する研究成果

〈宮都・交通〉　木簡の研究成果も援用しながら、日本古代の宮都・交通に関する多数の論文を執筆し、それらを全面改稿する形で、著書『日本古代の宮都と交通―日中比較研究の試み――』（全 780 頁）を刊行した。この著書では、Ⅰ日唐律令条文の比較検討、Ⅱ宮都の展開、Ⅲ交通の運用実態、の三部構成のもと、飛鳥時代から平安時代までの宮都と交通について、日中比較研究の手法を交えつつ、法的枠組みと実態の両側面から論じた。この著書に所収しなかった関連論文としては、宮都における門の警備体制を論じた「古代王宮の護り」、天平 7 年・9 年の疫病を交通の観点から論じた「天平の疫病大流行―交通の視点から―」、駅家経営のあり方を浮かび上がらせた「文字資料からみる駅家」、古代淀川流域の動向を探った「古代淀川流域の動向」が存在する。なお、淀川流域の一つである大阪府摂津市の古代史については、分担執筆した『新修摂津市史１　自然地理　先史・古代　中世』で詳しく論じた。

〈公民制その他〉　論文「公民制の成立と大化改新」において、新たな木簡の出土によって、公民制成立の捉え方が変わりつつあることを述べた。論文「『日本書紀と日向』において、公民制の導入が少し遅れた南九州の状況を概観してみた。論文「日本列島における漢字使用の始まりと東アジア」において、東アジアの動向を見据えつつ、日本古代国家の成立過程の問題と関連させながら、日本における漢字文化の受容過程をたどってみた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計30件（うち査読付論文　11件／うち国際共著　2件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 市大樹	４．巻 22
２．論文標題 日本古代文書木簡の展開	５．発行年 2023年
３．雑誌名 東西人文	６．最初と最後の頁 241～274
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 市大樹	４．巻 26
２．論文標題 日本の七道制と唐の十道制	５．発行年 2023年
３．雑誌名 唐代史研究	６．最初と最後の頁 37～60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 市大樹	４．巻 729
２．論文標題 書評　吉川真司著『律令体制史研究』	５．発行年 2023年
３．雑誌名 日本史研究	６．最初と最後の頁 63～70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 市大樹	４．巻 132-10
２．論文標題 書評　鐘江宏之著『律令制諸国支配の成立と展開』	５．発行年 2023年
３．雑誌名 史学雑誌	６．最初と最後の頁 72～80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 市大樹	4．巻 31
2．論文標題 隠岐の古代史―律令国家の「前線基地」―	5．発行年 2024年
3．雑誌名 しまねの古代文化	6．最初と最後の頁 92～119
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 市大樹	4．巻 32
2．論文標題 隠岐国荷札木簡とその周辺	5．発行年 2024年
3．雑誌名 島根県古代文化センター研究論集	6．最初と最後の頁 233～276
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 市大樹	4．巻 別冊37
2．論文標題 国府の成立	5．発行年 2022年
3．雑誌名 季刊考古学	6．最初と最後の頁 20～25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 市大樹	4．巻 759
2．論文標題 日本の7世紀木簡と韓国木簡	5．発行年 2021年
3．雑誌名 考古学ジャーナル	6．最初と最後の頁 6～13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 市大樹	4．巻 46-2
2．論文標題 天平の疫病大流行―交通の視点から―	5．発行年 2021年
3．雑誌名 国際交通安全学会誌	6．最初と最後の頁 6～14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 市大樹	4．巻 19
2．論文標題 書評　河内祥輔、小口雅史、M・メルジオヴスキ、E・ヴィダー編『儀礼・象徴・意思決定―日欧の古代・中世書字文化―』―日本史の側から―	5．発行年 2022年
3．雑誌名 国際日本学	6．最初と最後の頁 127～141
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 市大樹	4．巻 27
2．論文標題 外国使節の来朝と駅家	5．発行年 2022年
3．雑誌名 島根県古代文化センター研究論集	6．最初と最後の頁 233～280
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 市大樹	4．巻 716
2．論文標題 書評　中村太一著『日本古代の都城と交通』	5．発行年 2022年
3．雑誌名 日本史研究	6．最初と最後の頁 76～83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 市大樹	4．巻 105-6
2．論文標題 書評　辻正博編著『中国前近代の関津と交通路』	5．発行年 2022年
3．雑誌名 史林	6．最初と最後の頁 83～89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 市大樹	4．巻 1009
2．論文標題 2020年度歴史学研究会大会報告批判・古代史部会	5．発行年 2021年
3．雑誌名 歴史学研究	6．最初と最後の頁 30～32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 市大樹	4．巻 130-2
2．論文標題 書評　榎英一著『律令交通の制度と実態―正税帳を中心に―』	5．発行年 2021年
3．雑誌名 史学雑誌	6．最初と最後の頁 58～66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 市大樹	4．巻 908
2．論文標題 飛鳥時代の木簡と歴史教育	5．発行年 2020年
3．雑誌名 歴史地理教育	6．最初と最後の頁 10～15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 市大樹	4．巻 622
2．論文標題 書評　大阪市立大学難波宮研究会編『日本史研究叢刊36　難波宮と大化改新』	5．発行年 2020年
3．雑誌名 古代文化	6．最初と最後の頁 148～150
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 市大樹	4．巻 843
2．論文標題 書評　佐々木虔一・武廣亮平・森田喜久男編著『日本古代の輸送と道路』	5．発行年 2020年
3．雑誌名 歴史評論	6．最初と最後の頁 70～74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 市大樹	4．巻 22
2．論文標題 日本の7世紀木簡からみた韓国木簡	5．発行年 2019年
3．雑誌名 木簡と文字	6．最初と最後の頁 99～124
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 市大樹	4．巻 56
2．論文標題 天平期節度使体制下の文書送達―出雲国計会帳にみえる節度使関係文書の検討―	5．発行年 2018年
3．雑誌名 島根史学会会報	6．最初と最後の頁 １～22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 市大樹	４．巻 821
２．論文標題 公民制の成立と大化改新	５．発行年 2018年
３．雑誌名 歴史評論	６．最初と最後の頁 39～49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 市大樹	４．巻 70-3
２．論文標題 木簡の視覚機能という考え方	５．発行年 2018年
３．雑誌名 古代文化	６．最初と最後の頁 57～63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 市大樹	４．巻 263
２．論文標題 書評　小倉慈司・三上喜孝編『国立歴史民俗博物館研究叢書４　古代日本と朝鮮の石碑文化』	５．発行年 2018年
３．雑誌名 歴史と地理	６．最初と最後の頁 44～48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 市大樹	４．巻 40
２．論文標題 書評　馬場基著『日本古代木簡論』	５．発行年 2018年
３．雑誌名 木簡研究	６．最初と最後の頁 226～236
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 市大樹	4．巻 50
2．論文標題 門籍制に関する一考察	5．発行年 2017年
3．雑誌名 史聚	6．最初と最後の頁 27～38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 市大樹	4．巻 964
2．論文標題 日本古代木簡の資料的特質―廃棄論・機能論・形態論の視点から―	5．発行年 2017年
3．雑誌名 歴史学研究	6．最初と最後の頁 2～13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 市大樹	4．巻 834
2．論文標題 書評と紹介　相原嘉之著『古代飛鳥の都市構造』	5．発行年 2017年
3．雑誌名 日本歴史	6．最初と最後の頁 93～95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 市大樹	4．巻 610
2．論文標題 書評　俣野好治著『律令財政と荷札木簡』	5．発行年 2017年
3．雑誌名 古代文化	6．最初と最後の頁 139～141
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 市大樹	４．巻 95
２．論文標題 『万葉集』からみた古代交通制度の運用実態	５．発行年 2018年
３．雑誌名 美夫君志	６．最初と最後の頁 １～25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 市大樹	４．巻 3
２．論文標題 古代淀川流域の動向	５．発行年 2018年
３．雑誌名 新修摂津市史　史料と研究	６．最初と最後の頁 247～271
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計11件（うち招待講演　6件／うち国際学会　3件）

１．発表者名 市大樹
２．発表標題 木簡と万葉集
３．学会等名 萬葉学会（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 市大樹
２．発表標題 木簡からみた古代の食
３．学会等名 東海学シンポジウム（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 市大樹
２．発表標題 三上喜孝「日本古代木簡の型式分類と機能的分類」に対するコメント
３．学会等名 韓国木簡学会（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 市大樹
２．発表標題 日本古代木簡の展開
３．学会等名 韓国国立京慶大学校人文学術院ＨＫ＋事業団（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 市大樹
２．発表標題 隠岐国荷札木簡とその周辺
３．学会等名 島根県古代文化センター
４．発表年 2022年

１．発表者名 市大樹
２．発表標題 木簡からみた古代日本
３．学会等名 高大連携歴史教育研究会
４．発表年 2020年

１．発表者名 市大樹
２．発表標題 コメント　日本古代史の立場から
３．学会等名 日本西洋史学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 市大樹
２．発表標題 門籍制と門ﾎﾞｳ制をめぐる日唐比較試論
３．学会等名 史学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 市大樹
２．発表標題 日本の７世紀木簡からみた韓国木簡
３．学会等名 韓国木簡学会（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 市大樹
２．発表標題 『万葉集』からみた古代交通制度の運用実態
３．学会等名 美夫君志会（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 市大樹
２．発表標題 出雲国計会帳の魅力―節度使関係文書を中心に―
３．学会等名 島根史学会（招待講演）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計22件

１．著者名 市大樹	４．発行年 2024年
２．出版社 塙書房	５．総ページ数 780
３．書名 日本古代の宮都と交通―日中比較研究の試み―	

１．著者名 佐藤信、市大樹、他	４．発行年 2022年
２．出版社 吉川弘文館	５．総ページ数 276
３．書名 人物で学ぶ日本古代史　１	

１．著者名 吉村武彦、川尻秋生、松木武彦、市大樹、他	４．発行年 2023年
２．出版社 ＫＡＤＯＫＡＷＡ	５．総ページ数 272
３．書名 シリーズ　地域の古代日本 畿内と近国	

１．著者名 吉村武彦、加藤 友康、川尻 秋生、中村 友一、市大樹、他	４．発行年 2023年
２．出版社 八木書店出版部	５．総ページ数 384
３．書名 墨書土器と文字瓦	

１．著者名 広瀬和雄、山中章、吉川真司、市大樹、他	４．発行年 2022年
２．出版社 雄山閣	５．総ページ数 332
３．書名 軍事と対外交渉	

１．著者名 上野誠、大館真晴、市大樹、他	４．発行年 2022年
２．出版社 ＫＡＤＯＫＡＷＡ	５．総ページ数 232
３．書名 神話の源流をたどる 記紀神話と日向	

１．著者名 別所秀高、市大樹、他	４．発行年 2022年
２．出版社 摂津市	５．総ページ数 960
３．書名 新修摂津市史　第一巻　自然地理　先史・古代　中世	

１．著者名 大津透、市大樹、他	４．発行年 2020年
２．出版社 山川出版社	５．総ページ数 320
３．書名 日本古代律令制と中国文明	

１．著者名 中尾芳治、市大樹、他	４．発行年 2020年
２．出版社 同成社	５．総ページ数 882
３．書名 難波宮と古代都城	

１．著者名 木本好信、市大樹、他	４．発行年 2020年
２．出版社 岩田書院	５．総ページ数 844
３．書名 古代史論聚	

１．著者名 古瀬奈津子、市大樹、他	４．発行年 2021年
２．出版社 同成社	５．総ページ数 522
３．書名 古代日本の政治と制度	

１．著者名 佐藤信、市大樹、他	４．発行年 2020年
２．出版社 吉川弘文館	５．総ページ数 232
３．書名 テーマで学ぶ日本古代史　政治・外交編	

１．著者名 川尻秋生、市大樹、他	４．発行年 2019年
２．出版社 岩波書店	５．総ページ数 324
３．書名 古代の都	

１．著者名 川尻秋生、市大樹、他	４．発行年 2019年
２．出版社 竹林舎	５．総ページ数 533
３．書名 古代文学と隣接諸学8　古代の都城と交通	

１．著者名 秋田茂、桃木至朗、市大樹、他	４．発行年 2020年
２．出版社 大阪大学出版会	５．総ページ数 350
３．書名 グローバルヒストリーから考える大学歴史教育	

１．著者名 佐藤信、市大樹、他	４．発行年 2020年
２．出版社 筑摩書房	５．総ページ数 304
３．書名 古代史講義【宮都篇】	

１．著者名 坂詰秀一、市大樹、他	４．発行年 2019年
２．出版社 郵政考古学会	５．総ページ数 506
３．書名 辻尾榮市氏古稀記念　歴史・民族・考古学論攷（Ⅰ）	

１．著者名 遠藤 慶太、河内 春人、関根 淳、細井 浩志、市 大樹、他	４．発行年 2018年
２．出版社 八木書店	５．総ページ数 536
３．書名 日本書紀の誕生	

１．著者名 古瀬 奈津子、市 大樹、他	４．発行年 2018年
２．出版社 竹林舎	５．総ページ数 518
３．書名 律令国家の理想と現実	

1．著者名 角谷 常子、市 大樹、他	4．発行年 2019年
2．出版社 奈良大学	5．総ページ数 290
3．書名 古代東アジアの文字文化と社会	

1．著者名 鈴木 靖民、荒木 敏夫、川尻 秋生、市大樹、他30名	4．発行年 2017年
2．出版社 八木書店	5．総ページ数 552
3．書名 日本古代の道路と景観	

1．著者名 近藤大典、早川万年、市大樹、長瀬治義、田中弘志、山本崇	4．発行年 2017年
2．出版社 岐阜県博物館	5．総ページ数 76
3．書名 壬申の乱の時代―美濃国・飛騨国の誕生に迫る	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関